

書 評

Elisabeth Gössmann : Metaphysik und Heilsgeschichte,
Eine theologische Untersuchung der Summa Halensis (Alexander
von Hales) 1964, Max Hueber, München.

広瀬京一郎

救済史という言葉は、今日の流行語である。硬化したスコラ神学との連帯から、とかく近代人の間に不評だったキリスト教が、この新しい旗印の下に、巻返し作戦を始めたような観がある。実際、理性の進歩を信じる近代人は、古い形而上学と一体化したかに見える信仰を、その形而上学と一しょに時代おくれになってしまった、と判断する。しかし、このような判定に対しては、信仰の中核はそのような何らかの形而上学に関するものではなく、まさに「救済の出来事」に他ならない、と主張することによって、容易に答えることができるであろう。聖書神学では、プロテスタント（クルマン、ブルトマン等）、カトリック（シュナッケンブルク等）を問わず、そのような解釈が強調されてきているようである。しかしそれだけではない。さらに、この救済史的な歴史観こそ、近代ヨーロッパの歴史観の源泉であることを示し、その人類進歩の教義そのものが、救済史的終末論の世俗化に他ならないことを、暴露しようとする試みも行なわれている（たとえばレヴィット）。さきに巻返し作戦云々といった所以である。

救済史という言葉は最初、十九世紀のプロテスタント神学に現われたものだが、内容的にはすでに、カトリック・ロマンティックのうちにも見出される。たとえば F・シュレーゲルの場合がそれで、それについては本書の著者と夫君 W・ゲスマン氏の共同研究論文がある。そして今日ではすでに、「救済史は多くの個々の真理がこれに向けて秩序づけられる、包括的な神学的原理と考えられる」にいたっている。

この救済史中心の見方から、教父やスコラ学者たちを新らしく見なおそうとする傾向も、最近いちじるしくなった。ユスチヌス、イレネウス、アレクサンドリ

アのクレメンス、アウグスチヌスをはじめとして、聖ヴィクトルのフーゴー、オータンのホノリウス、ルーペルト・フォン・ドイツ、ヒルデガルト・フォン・ビンゲン等。

スンマ・ハレンシスは、従来の研究ではつねにその形而上学的な見地だけが問題にされてきたが、それをこの救済史的な方向から見なおそう、というのが本書のねらいである。ただ、この救済史的な要因こそ本来的にキリスト教的なものであるとする、多くの現代の思想家（たとえばE・ブルンナー）は、それに対して何らか哲学的な枢利は認めようとしなないけれども、この中世のスンマでは、当然のことながら、救済史的要因は形而上学的な努力を排除するものではない。ここでは、それは、ふつうの歴史的出来事をもつ単なる偶然性の性格をぬぎすて、永遠の形而上の本質と同様の取扱いをうける。この「救済史的な要因の形而上学化」*Metaphysierung des Heilsgeschichtlichen* ということが、このスンマ全体をつらぬいて見出される傾向であるとされる。本書の標題のある所以であろう。

本書は四部に分かたれ、第一部で神学の学問的性格を論じたあと、まず第二部ではキリスト論を、第三部で救済論を扱い、最後に第四部で神についての考察が行なわれる。スンマ・ハレンシス自体とも、当時のあらゆるスンマとも異なったこの構成が、すでに著者の意図するところをよく示している。

第一部で示されているように、このスンマでは神学の対象は端的に神と規定されないで、「修復の業におけるキリストによって認識される神的実体」(*substantia divina cognoscenda per Christum in opere restaurationis*)であるとされる。ここにはいうまでもなく、聖ヴィクトルのフーゴーの、創造の業 (*opus conditionis*) と修復の業 (*opus restaurationis*) との区別が前提されている。たしかにスンマ・ハレンシスでは、フーゴーの場合のように、神の救済史的行為そのものが直接問題になるのではなく、「神的実体」が前面におし出されているのではあるが、神学の対象の規定の中に、救済史的要因が採りいれられていることは注目に値することであろう。

著者はこの点を足がかりにして、スンマ・ハレンシスを救済史的順序をもって再構成しようと試みるのである。キリスト論からはじめるのは、聖書に記された歴史的現実から出発して、歴史の彼方にある形而上的なものに帰ってゆく、いわ

ば帰納的方法をとることで、中世の演繹的方法に対立する。中世においては、まず神の本性と位格の関係や、創造、墮罪などが明らかにされたのちに、はじめてキリストについて論じることが可能であったのである。たしかに、今日の教理神学（たとえばK・ラーナーのそれ）は、こうした伝統的な中世的構成と袂別しようとする勢いをみせている。しかし、中世のスンマは中世の構成にしたがって叙述すべきではなかつたらうか。この著者の試みるような再構成は、現代の問題意識を過去の作品の中に読みこむ誤ちを犯してはいないだらうか。しかしそのような危険については、著者は十分に意識している。「現代の神学における救済史的な方向は、たしかに中世の作品における場合とは別個のものである。しかしそれによってこそ、以前には見すごされていた、中世の一定の構成や思考様式を、目ざとく見出すことができるようになるのである。」それに、著者が目指しているのは、この本の副題が示しているように、「スンマ・ハレンシスの神学的研究」であって、歴史的研究ではないともいえる。著者は「形而上学と救済史という現代の問題に対して、スンマ・ハレンシスから中世の答えを求めている」のである。

ロージャ・ベーコンによって一頭の馬より重いと評されたこのスンマは、そのころからすでにアレクサンデル一人の著作というより、多くの著者によるものといわれていた。けれどもその内容を充分検討してゆくと、従来の予想をはるかに上回るほどの統一性をそなえていることが明らかになってくる。それはたしかにハレスのアレクサンデルの著作とは言い難いであろう。しかしそこには、一致した神学的見解をもった一団の人々が見出される。ジルソンの言うように、それは「パリ大学における十三世紀のフランシスコ会の神学の精神」を表現しているのである。

本書はその成立の事情などについての歴史的な研究には詳しくふれないで、ただちにその統一的な神学的立場に迫ってゆこうとする。それは結論的に一言でいえば、方法の上からも内容の上からも、「救済史的な要因を人間の内に摂取すること」innermenschliche Aneignung des Heilsgeschichtlichen だといわれよう。方法の上からも、というのは、神学が他の一切の学問のように、原理から結論へと推理をすすめてゆくだけの純知性的なものではなくて、「神の正義と憐みの信仰から出る畏れと愛によって、感情 (affectus) を動かす」ことをめざすものであ

り、そこでは純粋に観想的な真理でなく、感情によって把握されるべき「善としての真理」(veritas ut bonitas) が取り扱われるのだからです。

内容の上からいえば、その例証はこのスンマのいたるところから挙げる事ができるが、たとえば、「キリストの受難はさまざまのしかたで私たちの魂に届く。すなわち、魂に与えられるその功德のめぐみによって、あるいは魂のための罰のゆるしとして、あるいはまた、魂のうちで愛せられ、信ぜられ、同苦によって作られ、模倣によって形づくられることによって。」ここではキリストの受難について、その客観的救済史的側面とともに、人間内的側面があわせ強調せられている。

このように、スンマ・ハレンシスでは、「神の真理それ自体ではなくして、人間のための、人間における神の真理」が扱われる。これはラーナーもその正当性を指摘している、神中心性と矛盾しない「人間中心性 (Anthropozentrik)」である。実際、このスンマ全体がいわば、「人間学的に方向づけられている」のであり、神学は、単に人間的な諸学科に対して、一切の学問のうちで最も人間的なものにされている、と本書の著者は力説している。たとえば「キリスト論もある意味で神学的人間学の高揚」であり、ボナヴェントゥラの場合のように、それ自身が神学全体の構造の中核になっているというより、むしろ、人間学的な視野の内部で扱われているのである。

さらに、第三部の救済論は実質的には神学的人間学を形成している。知性と感情、自由意志、あるいは人間の神との相似性について論じた箇所その他、とくに注目されるのは、男女の性別について論じた章である。ゲスマン夫人はまれにみる女性神学者として、神学的女性論にとくに深い関心をよせておられるようである。この中世のスンマについても、女性の神学的位置づけについて、詳しく論じている。スンマ・ハレンシスでは、創造の順位にもとづく男性の優位は認めながら、両性の人間としての同等性を強調する。その際、女性の創造を、ただアダムの墮罪との関連から説いたギリシャ神父たち（たとえばニッサのグレゴリオス）の極端な説を、きびしく斥けている点など、両性の同等性という、現代ではごくあたりまえの主張が、この時代では困難でもあり、したがってまた、それだけに注目すべきことでもあったことが明らかにされている。

最後の、神について考察される第四部においても、神の存在を被造世界の存在

と対置させることにより、むしろ、三位一体の神の内的存在が、いかに人間の内に告知され、確認されるか、ということが追求されなければならない。このスンマにおいては、とくに人間学的内容に関しては、神の概念から演繹する方法はあまりとらないで、人間の体験や、罪ある、あるいは神の恩恵の下にある人間のあり方の厳密な叙述が行なわれる点、多分に現象学的な傾向がある。神はここでは「最初の言葉ではなく、むしろいわば最後の言葉」である。

終に断っておかなければならないが、以上の紹介の拙文が、もし読者に、本書が歴史的な客観性を欠如しているのではないか、というような疑念を与えたとなれば、著者に対しても読者に対しても、深くお詫びをしなければなるまい。私たちは安んじて、「馬よりも重い」このスンマを通読する労を、本書の要を得た叙述によって、自ら免ずることができる。本書は、著者自身が意図するように、現代の神学的問題意識に対して、多くの示唆を与えるとともに、また、今まで比較的等閑視されてきた、フランシスコ会派の思想史的研究が推進される上にも、この上なく貴重な道標をなすものと思われる。

M. Schmaus *Die Spannung von Metaphysik und Heilsgeschichte in der Trinitätslehre Augustins*. Studia Patristica. Vol. VI, 1962, p. 503—518.

A. Schindler *Wort und Analogie in Augustins Trinitätslehre*. Herm. Unters. z. Theol. Bd. 4, 1965, SS. 269, J. C. B. Mohr.

J. Mader *Die logische Struktur des personalen Denkens. Aus der Methode der Gotteserkenntnis bei Aurelius Augustinus* 1965, SS. 229, Herder Wien.

泉 治 典

アウグスティヌスの *De trinitate* は、三位一体の知解の道の上にすべての人の信仰と救いが立ちうる可能性を追及した巨大な試みであったが、その道が進む